

在宅医療見学での学び

在宅医療の現場を初めて見学しての一番の気づきは、在宅医療は一番患者さんに向き合う医療であると感じました。

クリニックでの朝の申し送りの際に、患者さんの疾病だけでなく、その人の家族との関係、患者や家族の考えを共有し、その人に必要な医療をスタッフ全員で考えいらっしやいました。在宅医療はしばしば終末期の患者さんが対象になることも多いと思いますが、患者さんの疾病を治すことに注力するだけでなく、その方の気持ちに沿って、その方が人生を全うできるようなサポートをできるよう尽力されているスタッフの方の姿がありました。

訪問診療の間診も体のことだけでなく、その方の不満や不安を丁寧に聞いたり、その方を支える家族の人に対してもたくさんお声掛けをされていました。また在宅医療は、薬剤師・ケママネージャー・看護師・歯科医師・理学療法士の方など多くのステークホルダーがいますが、綿密な連携を取ってその方をサポートされており、情報共有などとても難しいところを、各ステークホルダーが非常に努力されていると感じました。特に訪問直後に行われているディクテーションでしっかりと主観・客観的視点で患者の状況を記録し、伝達されていらっしやいました。それは疾病ではなく、人を診る在宅医療において非常に有効な手段であると感じました。

今後在宅医療は増えていくと思いますが、それを受ける患者さんがどのようにすれば、安心して診療を受けられるかというのは大きな課題になると思います。いつものかかりつけの先生がそのまま訪問をしてくれれば一番良いですが、やはり外来と在宅の兼業は医師側にとって非常な大きな負担です。信頼関係をきちんと構築さえできれば、沢山の先生が患者さんを支えるというグループ診療の仕組みは今後の在宅医療において必要な形であると感じました。

最後に、このような機会を下さった遠矢先生、桜新町アーバンクリニックの皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございました。